

氏名(本籍)	鈴木公基(茨城県)
学位の種類	博士(心理学)
学位記番号	博甲第3309号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	心理学研究科
学位論文題目	対人的文脈における認知的完結欲求の役割

主査	筑波大学教授	教育学博士	新井邦二郎
副査	筑波大学助教授	教育学博士	桜井茂男
副査	筑波大学助教授	教育学博士	服部環
副査	筑波大学助教授	博士(心理学)	庄司一子

論文の内容の要旨

(1) 論文の目的

おもな目的は2つある。ひとつは、認知的完結欲求(問題に対して確固たる答えを求め、曖昧さを嫌う欲求)の個人差を測定する尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討すること、もうひとつは、その尺度を用いて対人的文脈における認知的完結欲求の役割を明らかにすることである。

(2) 論文の概要

論文は第1部「理論的検討および本研究の目的」、第2部「実証的検討」、第3部「総括」で構成されている。第1部では認知的完結欲求の個人差、理論的枠組み、対人的文脈における役割、個人差の尺度等について概観したのち、本論文の目的と意義が述べられている。

第2部では12の研究によって実証的な検討が行われている。研究1～3では、認知的完結欲求の個人差を測定する尺度が作成され、因子分析の結果、決断性、秩序に対する選好、予測可能性に対する選好という3つの因子で構成されていることが明らかになった。尺度の信頼性と妥当性が確認され、尺度の多次元性も明らかになった。

研究4～6では、作成された認知的完結欲求尺度を用いて、認知的完結欲求の3つの側面の特徴が検討された。その結果、決断性が高い人は十分な量の情報処理を行おうとし、素早く反応をすることが適切な場合にはそのように反応すること、他者に対して開かれた態度をもっていることが明らかになった。秩序に対する選好の高い人は正確な情報処理を行おうとすること、予測不可能性に対する選好の高い人は正確な情報処理を行おうとするものの、物事は外的に統制されていると認知する傾向が強いこと、さらに他者に対して閉鎖的な態度をもっていることも明らかになった。

研究7～12では、対人的文脈における認知的完結欲求の役割が検討された。研究7と8では対人関係についての信念や態度との関係が検討された。その結果、決断性が高い人は対人的に積極的であること、予測不可能性の高い人は反対に消極的であること、秩序に対する選好の高い人は集団主義的相互依存的な信念をもつこと等が明らかにされた。研究9では情報処理量との関係が対人関係性を交えて検討された。その結果、

集団主義（相互依存的）傾向の高い人には認知的完結欲求と認知欲求との正の関連が見いだされたが、そうした傾向の低い人には一定の関連は見いだされなかった。

研究 10 と 11 では、他者への選好における認知的完結欲求の役割が検討された。秩序に対する選好の高い人は受容的な属性（女性性、人間性）の高い人を好むこと、決断性の高い人は相互協調的な対人関係が強い場合、社会的スキルを有する他者を求めないこと等の結果が明らかにされた。研究 12 では、対人葛藤場面における認知的完結欲求の役割が検討され、秩序に対する選好の高い人は、建設的な問題解決を可能にするような目標や葛藤解決方略を選択すること等が分かった。研究 7～12 の結果より、認知的完結欲求は各側面によって対人的文脈における役割が異なることが明らかになったと言える。

第 3 部では以上のような研究の要約と今後の研究課題がまとめられている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

認知的完結欲求の個人差が測定できるわが国ではじめての尺度を開発し、その信頼性と妥当性を確認した点、さらにその尺度を用いて実証的な検討がなされていなかった対人的文脈における役割を明らかにした点は、学問的に高く評価されるであろう。作成された尺度は認知的完結欲求に関する研究を大いに推進するものと期待される。対人的文脈における認知的完結欲求の役割についての研究成果には欧米との違いも予想されており、比較文化的な研究を触発するものと思われる。これらの点で本論文が今後の研究に与えたインパクトはかなり大きいものと言える。ただ、認知的完結欲求がどのように形成されるのか、認知的完結欲求と精神的健康との関連はどうなっているのか、等の問題は残されている。これらは今後の課題であろう。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。